

25. 脳血管障害の予後調査に関する一考察 -意識レベルと現在のADLの関係から-

【キーワード】

予後調査・意識レベル・ADL

西諫早病院 リハビリテーション部

○東 英文・金ヶ江光生・高柳 公司

高木 麻妃・大岡 輝貴(OT)・西口 政男

MD千葉 憲哉・千葉まさこ・福嶋 政昭

長崎大学医療技術短期大学部

MD種山富太郎

【はじめに】

我々は脳血管障害(以下、CVAと略す)に対し様々なアプローチを試みている。その中で予後予測をする事は、ゴールの設定、及び理学療法をすすめる上で重要な事の一つである。しかし、CVAは合併症など種々の問題があり、その予後は多種多様である。この為、予後予測には十分な評価と経験が必要であり、諸家により色々な報告がなされている。そこで今回、我々はCVA患者に対して予後調査を行い入院時からリハ開始までの意識レベルの変化と退院後の日常生活動作(以下、ADLと略す)の関係について比較検討し、若干の知見が得られたので報告する。

【対象と方法】

対象：平成4年1月より5年3月末日までの15ヶ月間に当院へ入院したCVA患者で発症後6ヶ月以上を経過した例であり、脳内出血15名、くも膜下出血3名、脳梗塞42名である。年齢は37～87歳(平均66.5歳)であった。

方法：CVAについては脳梗塞・くも膜下出血・脳内出血の三つに分類し、入院時のCT・MRI所見と入院時からの意識レベルの変化及び、現在のADLをそれぞれ比較検討した。意識レベルの判定にはGlasgow Coma Scale(以下、GCSと略す)を使用し、現在のADLについては電話連絡にて調査を行い、可能な限り患者自身に直接答えてもらった。不在もしくは、他院に入院中の場合は家族或いは、現在の担当理学療法士に回答を求めた。尚、今回死亡例については除外した。

【結果】

①意識障害の変化とADLについては、入院時の意識障害が重度な患者程、現在のADLの自立度は低下していた。
②病巣の大小と現在のADLについては、病巣の大きいもの程ADLの自立度は低下していた。又、意識レベルとの関係はあまり認められなかった。

③原因別でADLの自立度が、最も低下の傾向を示したのは脳梗塞であった。

④最後に本人の主観的満足度として、現在の状態にどのくらい満足しているかとの問いに対しては回復が良い患者程、満足度は低かった。

【考察】

今回、当院において発症後6ヶ月以上を経過したCVA患者に対し予後調査を行い、入院時のCT・MRI所見と意識レベルの変化及び、現在のADLについて比較検討した。その中で意識レベルの変化とADLの関係については、入院時の意識障害が重度な程、現在のADL自立度は低かった。これは意識レベルが低い患者程、回復が遅く座位及び、立位への移行が遅れ、廃用性症候群も併発しやすく、加えて精神的・心理的なモチベーションの低下等の関与によるものと推察された。病巣の大小と意識レベルの関係はあまり見られなかったが、ADLとの関係については病巣の大きいもの程、ADLの自立度が低い傾向にあった。これは病巣が大きい程、広範囲に及ぶ脳損傷がある為と思われる。次に原因別では、脳梗塞がADL自立度の低い傾向を示した。くも膜下出血に関しては、死亡例がほとんどであったが生存している例については、ADLは自立している患者が多かった。脳内出血で最も自立度の低かったのは脳幹部出血であった。これは脳幹部出血では失調症状が著明でバランス低下等安定性に欠ける為、ADLが低下していると考えられる。最後に本人の主観的満足度に対してアンケートを行った結果、自立度が高い患者程、満足度は低かった。これは自立度の高い患者程、回復過程に伴いneedsも高くなり質の向上を求め、加えて社会的不利という面において公共物・施設の利用さらに職場復帰など求める患者が多く、現在の状況を不満と答えた例があった。又、高齢な例ではほとんどが全身状態等の問題から病院生活を余儀なくされ、まだ現在も病院に入院している場合が多く、この為ADL自立度も低かった。しかし、これらの場合、満足度としては比較的高かった。これは高齢ということもあり職場への復帰等の必要性を感じない為と思われる。又、一人暮らしなど介護者の不在による自宅での生活が困難な為、現在の生活に妥協している様に思われた。

【まとめ】

①当院におけるCVA患者に対する予後調査を行った。
②意識障害が重度な患者及び病巣の大きい患者程、現在のADLの自立度は低下していた。
③主観的満足度として回復が良い患者程、満足度は低かった。
④意識障害が重度な患者程、予後は不良と推察された。